夏の谷に遊ぶ（3）

--- 若狭・耳川うつろ谷 ---

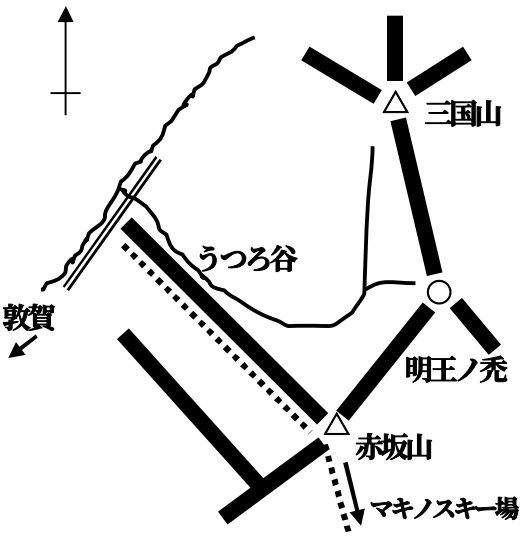
（２００８年8月の記録）

秋田 誠

日　　程：２００８年8月1日～2日（土）

メンバー：Ｌ秋田誠、高田忠雄、谷内資康、（彷徨倶楽部）、菅宏（比良雪稜会）、小関紀子（湖南岳友会）、秋田婦美

タ イ ム：出合８：１０ --- Ｆ１（１０ﾒｰﾄﾙ）８：２０～８：５０--- Ｆ２（１０ﾒｰﾄﾙ、標高４５０ﾒｰﾄﾙ）９：００～９：３０ --- Ｆ３（2段、１２ﾒｰﾄﾙ）下９：４５ --- 二俣（標高６００ﾒｰﾄﾙ）１０：３０ --- 逆「く」ノ字の滝１１：１０--- 明王ノ禿１２：４５～１３：００ --- 赤坂山１３：３０～１３：４５ --- 出合１５：００



上流部で堰堤工事が進んでいるためか、耳川沿いの林道は道幅こそ狭いが路面の舗装が良く、車でのアプローチは快適だった。しかし、順調に走り過ぎたあまり肝心のうつろ谷への分岐を見逃してしまい、３０分ほど余分なドライブをしてしまった。本流に沿う林道を辿り、橋を渡ってすぐ左に分岐する未舗装の道に入り２本目の沢がうつろ谷で、分岐から５分ほどであった。

樹木が生い茂ったうつろ谷の出合は貧弱でうす暗く陰気な感じだ。滝が連なる愉快な谷と噂に聞いていたが、なんだか程遠い渓相である。人気の谷にしてはやけに草深い右岸の踏み跡を、こんなところでダニに食われたらかなわんなあと内心思いながら辿る。２つ目の堰堤を左岸の急なガレをよじ登って越し沢に降りた。ほどなく谷は左折して小さなゴルジュとなるがすぐ行き止まりとなり、Ｆ１（１０ﾒｰﾄﾙ）が右壁から豊かな水量で落ちていた。太い流木をくぐって浅い釜を渡り、水しぶきに濡れた右壁から取り付く。滑りやすいホールドを拾って滝の中程まで攀ると傾斜が増しホールドが乏しくなるので、流水をまたいで左壁に移る。落口までの左壁の登りは容易だった。滝の水をまともに浴び、水中の小さなホールドを探るトラバースがポイントだ。水の勢いが案外強いのでバランスを保つのに苦労した。ところが、後続パーティーのトップは、ひょぃっといとも簡単に滝の流れを飛び移って登って来るではないか。聞けばこの谷は3度目とのこと。なるほど。それなら確信をもって飛べるはずだ。盛夏の週末というのに、谷で出遭ったのは後にも先にもこの名古屋から来たという５人組だけだった。

Ｆ２（直瀑、１０ﾒｰﾄﾙ）は右壁を直登した。小さな段状のハングを乗越して滝芯に沿って攀ろうと試みたが脆い岩に阻まれ、壁から張り出している太い根っこをホールドにして右にトラバースし滝の上に立った。F2 を越すと自然林の中を縫って流れる綺麗な滑が続いた。Ｆ３（2段、１８ﾒｰﾄﾙ）は水流に沿って右側を登った。手頃な傾斜でホールドも豊かなので、滝登りの楽しさを味わえる。Ｆ３を越すと５～８ｍ の滝が連続し応接のいと間がない。水の中にホールドを求めシャワークライミングで愉快に越えていく。下界では３５℃を超す猛暑なのだろうが、私たちは快適な別世界に遊んでいる。太い流木を架けたチムニー滝（１２ﾒｰﾄﾙ）を左岸から水線沿いに越すと、谷は左折して標

高６００ﾒｰﾄﾙの二俣となった。右俣に入れば直接赤坂山の山頂だが、すぐ沢が尽きてしまいそうだったので明王ノ禿を目指して左俣に入る。なおも滝が続き、この谷の人気の高さが頷けた。

流水をまともにかぶる直登を嫌って、逆「く」の字に水を落とす赤い岩肌の滝（２段、１０ﾒｰﾄﾙ）を右岸の急なルンゼから高巻くと流れは穏やかに変貌した。標高６５０ﾒｰﾄﾙの二俣は右に進路を求める。流れは痩せて源頭の様相が濃くなった。水が尽きる前にと、持ち上げたビールを流れで冷やして乾杯した。夏の沢登りの醍醐味である。次第に窪状になり水流がなくなる頃、潅木の切れ間に見覚えのある明王ノ禿のザレを確認した。沢を離れ下草の殆んど生えていない疎林の中をしばらく登ると明王ノ禿直下の登山道に出た。

赤坂山からはよく踏まれた粟柄越えの道をのんびり下り出合に戻った。出合では、出発の時に菅さんが流れに沈めておいてくれた丹精のすいかをご馳走になり、最近すっかり馴染みとなった「きららの湯」で汗を流して家路についた。

F1（10m）

F2（10m）

木立の中を攀る

F3（18m）

滝場は続く

チムニー滝（12m）